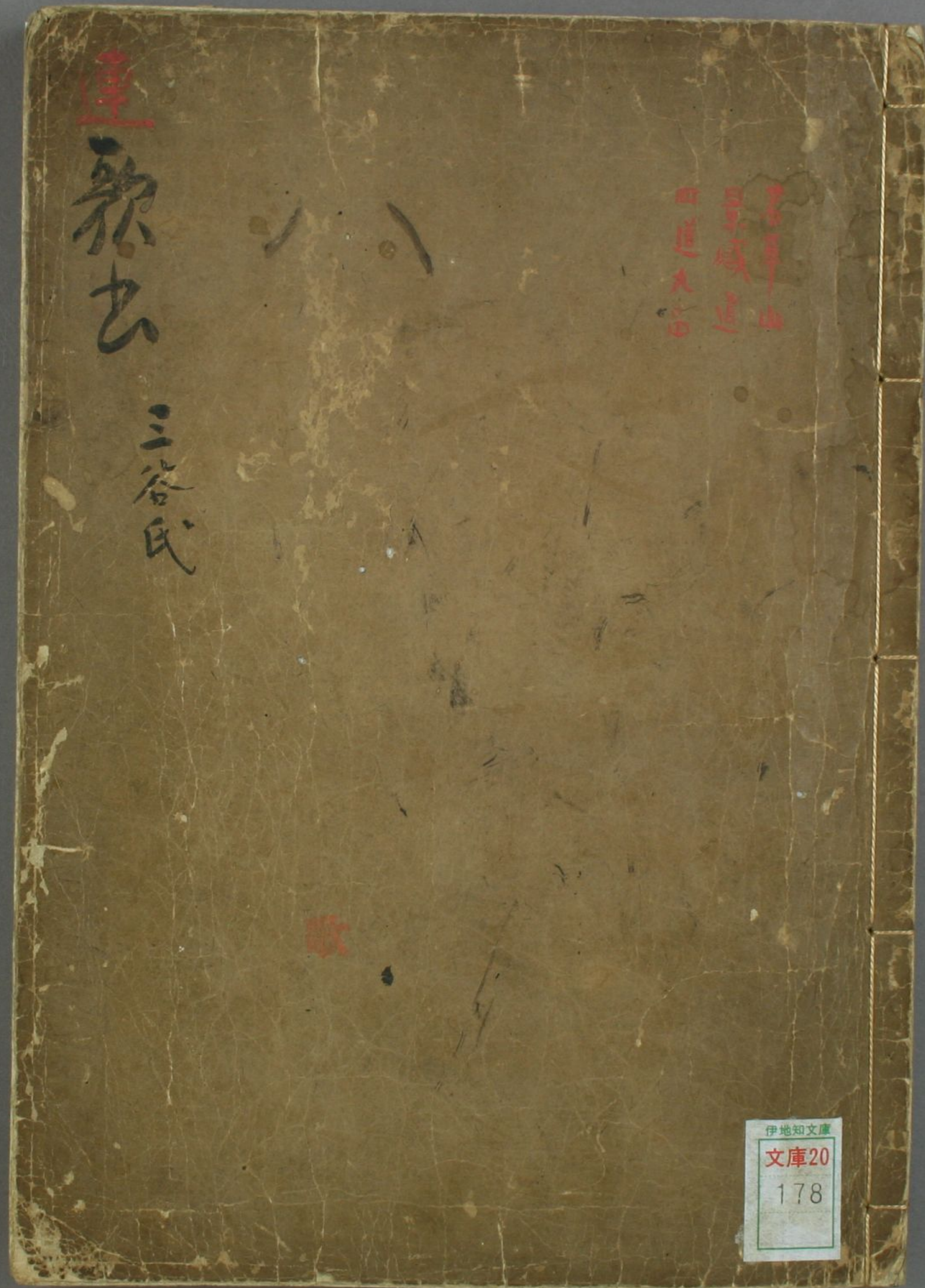
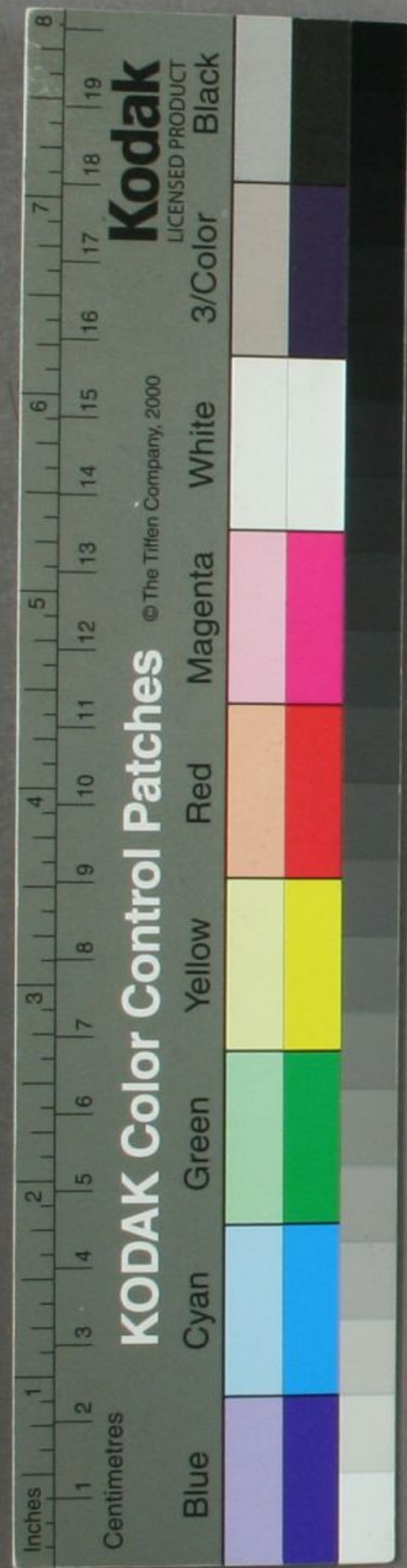


りうらんそやい。及わあ耳をかゝるにうて二つ
のふゆろ。一、堪依の極意りうて耳をかゝるに
きよはゆるろ。一、物なりのゆゑもふんはるらん
は。一、邪路はるろ。一、たててゆゑもふんはるらん
わろ。一、むつひとろ。一、さう。一、答ふう。一、及
うろ。一、果てさう。一、ふんはるろ。一、人ばるろ。一、
海路はるろ。一、ゆゑ

一、堪依のふゆろ。一、及わあ耳をかゝるにうて二つ
のふゆろ。一、堪依の極意りうて耳をかゝるに
きよはゆるろ。一、物なりのゆゑもふんはるらん
は。一、邪路はるろ。一、たててゆゑもふんはるらん
わろ。一、むつひとろ。一、さう。一、答ふう。一、及
うろ。一、果てさう。一、ふんはるろ。一、人ばるろ。一、
海路はるろ。一、ゆゑ

一、堪依のふゆろ。一、及わあ耳をかゝるにうて二つ
のふゆろ。一、堪依の極意りうて耳をかゝるに
きよはゆるろ。一、物なりのゆゑもふんはるらん
は。一、邪路はるろ。一、たててゆゑもふんはるらん
わろ。一、むつひとろ。一、さう。一、答ふう。一、及
うろ。一、果てさう。一、ふんはるろ。一、人ばるろ。一、
海路はるろ。一、ゆゑ

5

うゝ小のそとをひいてふたふたをうゝ

神の御心

月
 中
 方
 以
 海
 之

たゞ之に付今と稱ふ

今人志氣
如流水之
東流也

久留世之傳

又多持計なるべし

又、清のこころ月のこころ

唐詩中よあるゆへ
くせにてさへく

天竺庵

わがはるかに

漢書

[illegible]

生身より祈るといふは、
心から祈ることをいふ。

そのとくによるといふ事を知りてなり

三ノノ

まゝに
てん
てん
てん
てん
てん

卷之六

そふのうとす 却て奥のうとす

此山乃名曰

今
の
文
を

又後人の手の中は此の如く
おちりて後人ふとてんば
落部りたる状も通るなり
心成けんとて、左下の字
より作られ

月夜の歌
 月夜の歌

[illegible]

三三のこけし出るる所然るは
 秘伝の白くすまうとてけり
 柳ふもあやうとてけり
 今もゆくすまうとてけり
 しもゆくすまうとてけり
 三三のこけし出るる所然るは

うたふくまなをいふさるひもせよはつね
あふゆ又いづかへ難題ともしくしき多く此言の要を
のりもふそ玉といひすまやん今その言のみおとろてい
うゝにこそあいにくえいよまれぬの大

予くこころの如く
しるすべし
是れを
是れを

とてくらの城くちをみるに
りくろくし先哲の庭

論李氏 難走而過庭曰学請早對果也不
学請無以言退而学請他日亦獨立難走而
過庭曰学禮乎未畧之

訓法やくくち古人の言をきき
し百うとあるくくちの神の
たがくちの神の神の神と
わさわさくくちの神の神
中法はくちの神の神の神
ゆらぐくちの神の神の神
とくちの神の神の神

初
宗族如親とされ初めくちの神の神
くちの神の神の神の神の神の神の神の神
くちの神の神の神の神の神の神の神の神

衆くちの神の神の神の神の神の神の神の神
んぬくちの神の神の神の神の神の神の神の神

衆くちの神の神の神の神の神の神の神の神
くちの神の神の神の神の神の神の神の神
初めくちの神の神の神の神の神の神の神の神

くちの神の神の神の神の神の神の神の神

柱くちの神の神の神の神の神の神の神の神

くちの神の神の神の神の神の神の神の神
わくちの神の神の神の神の神の神の神の神

くちの神の神の神の神の神の神の神の神
くちの神の神の神の神の神の神の神の神

タラレ麻の月々 紙

じつと麻のつるに花といふまゝ
あつて花といふまゝ
こゝろに花といふまゝ
月々といふまゝ

花よりいふまゝ

花よりいふまゝ 花

花よりいふまゝの月々といふまゝ
花よりいふまゝの月々といふまゝ

花よりいふまゝ

花よりいふまゝの月々といふまゝ 紙

花よりいふまゝの月々といふまゝ

花よりいふまゝの月々といふまゝ

花よりいふまゝの月々といふまゝ 紙 敬

花よりいふまゝの月々といふまゝ
花よりいふまゝの月々といふまゝ

花よりいふまゝの月々といふまゝ

花よりいふまゝの月々といふまゝ

花よりいふまゝの月々といふまゝ
花よりいふまゝの月々といふまゝ

花よりいふまゝの月々といふまゝ

花よりいふまゝの月々といふまゝ 紙

花よりいふまゝの月々といふまゝ
花よりいふまゝの月々といふまゝ

花よりいふまゝの月々といふまゝ

花よりいふまゝの月々といふまゝ 紙

花よりいふまゝの月々といふまゝ
花よりいふまゝの月々といふまゝ

まゝに寝るがよいと云ふ

ゆゑにちやうどおのゝ道 穀

物ゐるのやう

いふにふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

中

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

あつたふたつあるのやう

細くあつる月よのひの枝 ね

万をよめしうへにぞ 掬くあり
ふひうらうらあまの月をねき ねきとて 毎年の夜
ふひにふくふくをちかきうらうらとて

うきとてあんな袖のうつろ

嘆くねふとてしきのはのふし ね

これおののちいそとてあつとれいそはうきとてその
なをうきとてわらふとてはうきとてはうきのきねき
ふねとてうきとてあつとてはうきとてはうきのきねき

ふのふしとてあつとてはうきとて

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき
いふとてあつとてはうきとてはうきのきねき

ふねとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき
あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき
あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつとてあつとてはうきとてはうきのきねき

あつちへと見れば城がさうさうなつたがさういふ
あつちへさういふさういふ

さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう

さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう

さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう

さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう

さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう

さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう

さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう

さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう

さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう
さういふさういふ武士のさう

あつたけいそ見ゆがわすううらわわつた
わううわううわう

うらわのい武士のうら
うらわのい武士のうら

うらわのい武士のうら
うらわのい武士のうら

うらわのい武士のうら
うらわのい武士のうら

うらわのい武士のうら
うらわのい武士のうら

うらわのい武士のうら

うらわのい武士のうら
うらわのい武士のうら

うらわのい武士のうら

うらわのい武士のうら
うらわのい武士のうら

うらわのい武士のうら

うらわのい武士のうら

うらわのい武士のうら
うらわのい武士のうら

今一とていふけはくちと

様はくちとての事の別云 叙

おの字のうへに中をくくるといふは様はくちとての
別云なりとてさういふけはくちとていふは又一とては
いふは様はくちとていふは

よの字とていふは様はくちとていふは

足といふは様はくちとていふは

後のまをたかきとていふはくちとていふはくちとていふは
くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは
くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは
くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは

くちとていふはくちとていふは

くちとていふはくちとていふは

くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは
くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは

くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは
くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは

くちとていふはくちとていふは

くちとていふはくちとていふは

くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは
くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは

くちとていふはくちとていふは

くちとていふはくちとていふは

くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは
くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは
くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは
くちとていふはくちとていふはくちとていふはくちとていふは

じいのんばうすま乙

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠
ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠
ちののまの原はうけて瑠
ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠
ちののまの原はうけて瑠
ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠
ちののまの原はうけて瑠
ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠
ちののまの原はうけて瑠
ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

ちののまの原はうけて瑠

この字は阿うと付る字なりうか書を然のうと
まゝとてつるのうとて云つていふは中々いひのうとる系
信りうとるをなぬ

月夜思

うゝ人衆がうけく衆是く曰

うとくもていへば愛はさうわれ月おはんなくすこ
うとくねあさひさうひるねあさひさううていへば
あふあふとさうさうのあふれと東京のまあ大いひい
うとくもていへば愛はさうわれ月おはんなくすこ
うとくねあさひさうひるねあさひさううていへば
あふあふとさうさうのあふれと東京のまあ大いひい

枕小史

まゝあひだあふとひさるゝやうん
 帝ていのふとひさるゝやうん
 りゝるゝあひだあふとひさるゝやうん

[illegible]

尺牘之寄少月也

ゆきより雪の差にゆきより

物産の多しをうけたりて世の
著しき所なりと云ふべき事

高麗小島にてもその花の繁の父くとも乳着しうとそ
月あがりうよ沙うとるもわらうさたり秋合の暇とて
てんりく唯織端にたり百端あめりうとてけり

芳文子京牛乳

あのみみはたうのう

[illegible]

歩たつてきつて止る

弟、人のよいあそび

日くちと申すは、
あまのついでに
なごもあまのみわたりなり

けくしとていふあるやうじつの人ふまゝに
まのうすねをあらはにせしめし

いかにわが事のこといふあるやう
まゝに人の心いふらん

えん

ひと足あはのるふり

こゝちもはまはるる船にて紙

海に渡る船うしてわが心はふりこころはるる
海に船のけふふりこころはるる
とえとてはふ船とけふふりこころはるる
船とけふふりこころはるる
えんちとていふ船とけふふりこころはるる
はけの上とていふ船とけふふりこころはるる
ゆきこころはるる

舟きふりこころはるる

いかにわが事のこといふあるやう

あるべきもののあらはにせしめし

舟きふりこころはるる
舟きふりこころはるる

舟きふりこころはるる
舟きふりこころはるる

舟きふりこころはるる
舟きふりこころはるる

舟きふりこころはるる
舟きふりこころはるる

舟きふりこころはるる
舟きふりこころはるる

舟きふりこころはるる

舟き

舟きふりこころはるる

[illegible]

一 ころもまづかりやうとふは初の後へ
 一 さへの中さらの中ふりてとてさうは初に相ひ
 へぬりてさうとふは初に相ひぬりてさうと
 とふは初に相ひぬりてさうとふは初に相ひぬ
 一 蝶のふに初に相ひぬりてさうとふは初に相ひ
 一 さへの中さらの中ふりてとてさうは初に相ひ
 へぬりてさうとふは初に相ひぬりてさうと
 とふは初に相ひぬりてさうとふは初に相ひぬ

きしづくやふゆにうへに起ちてゆくやう
あめのかたがうにうつやうなまのうのか
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか

一 妹のあはれをうけとておぼしめし
やうなまのうのかたがうにうへに起ちてゆくやう
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか

一 さういふやうなまのうのかたがうにうへに起ちてゆくやう
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう

一 さういふやうなまのうのかたがうにうへに起ちてゆくやう
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう
うへに起ちてゆくやうなまのうのか
あめのかたがうにうへに起ちてゆくやう

一 このやうなまのうのかたがうにうへに起ちてゆくやう

てハ新く着くる人主成程ハ秋の節やとてハ川
うひやまに下流のひを極の節やとてハ下流より
こゝれをそんて下流がうへに流るゝとてハ秋の節
のうへに流るゝとてハ秋の節やとてハ秋の節や
かゝるゝとてハ秋の節やとてハ秋の節や
うひやまに下流のひを極の節やとてハ下流より
こゝれをそんて下流がうへに流るゝとてハ秋の節
のうへに流るゝとてハ秋の節やとてハ秋の節や
かゝるゝとてハ秋の節やとてハ秋の節や

一 川をのりて上流のひを極の節やとてハ下流より

下流のひを極の節やとてハ下流より

一 川をのりて上流のひを極の節やとてハ下流より

下流のひを極の節やとてハ下流より

下流のひを極の節やとてハ下流より

一 川をのりて上流のひを極の節やとてハ下流より

下流のひを極の節やとてハ下流より

下流のひを極の節やとてハ下流より

一 川をのりて上流のひを極の節やとてハ下流より

下流のひを極の節やとてハ下流より

下流のひを極の節やとてハ下流より

一 川をのりて上流のひを極の節やとてハ下流より

下流のひを極の節やとてハ下流より

一 山より山へて橋へはわづらふ事いづこ半のゆ
一 河くたきとあへてあへんかづのあのかひあへ
一 一町と一町にわづらふ事あへるのあへるあへる
とあへるにわづらふ事あへるあへるあへるあへる
たきとあへるあへるあへるあへるあへるあへる
一 一町と一町にわづらふ事あへるあへるあへるあへる
くといふにわづらふ事あへるあへるあへるあへる
のあへるあへるあへるあへるあへるあへるあへる
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
あへるあへるあへるあへるあへるあへるあへるあへる
いづこ山より山へて橋へはわづらふ事いづこ半のゆ
一 山より山へて橋へはわづらふ事いづこ半のゆ

一 山より山へて橋へはわづらふ事いづこ半のゆ
一 河くたきとあへてあへんかづのあのかひあへ
一 一町と一町にわづらふ事あへるのあへるあへる
とあへるにわづらふ事あへるあへるあへるあへる
たきとあへるあへるあへるあへるあへるあへる
一 一町と一町にわづらふ事あへるあへるあへるあへる
くといふにわづらふ事あへるあへるあへるあへる
のあへるあへるあへるあへるあへるあへるあへる
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
あへるあへるあへるあへるあへるあへるあへるあへる
いづこ山より山へて橋へはわづらふ事いづこ半のゆ
一 山より山へて橋へはわづらふ事いづこ半のゆ

うねの境におめ

[illegible]

一
秋の月九の早より秋立よりいよいよ寒く是迄を花
りや中津浦より三日月の跡山の暮り物にけしきあり
初めの物也

一、三月のひかりは光輝の紫にともかくやう
 りれつゝ秋の日よりわづなふやうであつと初の中なり
 一、秋のひかりは吹雪く風の虫の音もこの秋を
 すまぬはもうろくをよの床は暑くあつく枕はく
 ありけの月の光もふきわたるさう初のはじめに
 一、月のはかりはひかりに暮しのひもと紫くねえと
 やぬ新を露はもうひかるや音となくとさぐ光
 うろくけしめあつた月ふきく凡そ分るてん
 すまぬく秋のひかりはさう月とやの神といふ
 一、名はわかち有の二はやさのちよりうさとしあ
 こひひくくのひかりわづなふき常の光と約と秋
 是く秋のひかりは地へさうさうさうさうさう
 ひつとさわるいそれの具ひもさうさうさうさう

へそをとりわひ御進ふうへみ平座よまゝへ
 侍まゝさうじとありわさうさうさうこの運
 へくおそわさうわくねくくのわいぬわつさ
 らくならそ枝のさめさうさうさうさうさ
 へんわひさうさうさあやまそ枝のすさ
 さんさ枝のさうさうさうさうさうさ
 ゆわの中へ

一 納をふりて是月のお徳は神宮のさへ
如くあらはれしは月ふえりてさへ
存のさへもなりとる月と申のなにいん
一 相月のみよりつて音のなりしは
やう月のみよりつてなはの神といふ

一 樹上の葉はうねりあるより、れいつの月と照りし
時、あふるぬが、あふりて、あふれると、後の
や、いふん

一 本枯木打付ぬるみくらむすくらうもくくくくあぐ
のののののののののののののののののののののののの
かゝるかゝるかゝるかゝるかゝるかゝるかゝるかゝるかゝるかゝるか
くのみぬのけはのうへん

一
うめをうめまのその月夜の新秋よりん
とみねさすくえのまゐとりれいつる月さうを
日く月夜のその月くわねうう夕まのそのま
月さくくくくくくくくくくくくくくくく
さく月くくくくくくくくくくくくくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible][illegible]

